

青い目の人形と

岐阜の子供たち

「青い目をしたお人形は
アメリカ生まれのセルロイド
日本の港に着いたとき
いっぱい涙を浮かべてた
私は言葉がわからない

迷子になったらなんとしよう
優しい日本の嬢ちゃんよ
仲良く遊んでやっどくれ
仲良く遊んでやっどくれ

(野口雨情作詞、本居長世作曲)

この「青い目の人形」という歌は、昭和になって日本の子供たちの間で大流行しました。こんな「人形交流の歴史」があったからです。

1 人形交流の歴史

大正時代、アメリカには多くの日本人が住んでいました。その頃のアメリカは不景気で失業者が溢れ、低賃金で働く日本人は嫌われ、次第に両国の関係は悪くなっていきました。

長く宣教師として日本に住んでいたギョーリック博士は、日本とアメリカの子供たちが友情を深めれば、大人になってからも仲良く暮らせるはずだと、日本の子供たちにアメリカの人形を贈ることを考えました。博士の呼びかけに約260万人の

アメリカの人たちが応え、約1万3千体の人形に手縫いの洋服を着せ、手紙やパスポートなどを持たせて、雛祭りに間に合うように日本へ送り出したのです。

2 岐阜に贈られてきた「青い目の人形」

1927年(昭和2)3月2日、アメリカから日本に贈られた「青い目の人形」の内119体が、岐阜県庁にやってきました。歓迎展示会が盛大に開かれた後、

国民生活は厳しい統制下におかれ、あらゆるものが戦争のために総動員されるようになりました。学校では、「大東亜共栄圏」建設に邁進し、天皇のために生命を捧げる生き方こそ日本人の最高の生きる道と教えられました。また、日本は「世界に一つの神の国、世界に輝くエライ国」とされ、敵対する国の文化は、ことさら差別・排斥されました。

このようにして、1943年(昭和18)頃には、岐阜県でも「青い目の人形は憎い国アメリカからの贈り物であるから、叩き壊せ」という声が多くなりました。



昭和18年の新聞記事

「男性教師が『鬼畜米英』と言いながら、校舎の裏でヘレンという名の人形を叩き壊した」、「敵愾心高揚の話が聞かされた後、約400名の全校児童がひとりひとり人形を蹴飛ばした」というような話が残っています。

各地の人形が処分されているという噂があちこちで聞かれるようになり、加茂郡八百津町和知小学校の水谷先生は、「青い目の人形・パッテロー」についても身の危険を感じる

ようになりました。「パッテローはスパイじゃない。人形に何の罪があるう。火あぶりや竹槍で突くのは忍びない。処罰されてもいいから一人で守ろう」と、裁縫室の押入から蚊帳を取り出して人形を包み、理科室の岩石標本箱の下に隠しました。

5 68年ぶり、答礼人形「ミス岐阜」の里帰り

「ミス岐阜」がクリーブランド美術館に保存されていることが明らかになったのは、1993年(平成5)。それを受けて草の根の活動として「ミス岐阜」里帰り運動がスタート。市民の募金も行われました。

そして1995年(平成7)5月25日、68年ぶりに「ミス岐阜」の里帰りが実現しました。68年前に送別会が行われた明德小学校で「帰国歓迎会」が行われ、「日本とアメリカが仲良くするためのお使いとしてアメリカへ出発した人形が、今帰ってきました」と、トランクから人形が取り出されると、大きな歓声と拍手が起きました。児童代表は「アメリカで大事にしてもらってよかったね。戦争が起き、いろいろな心配したことでしょう」と語りかけました。

その後「ミス岐阜」は、68年前に製作された東京の人形店で3ヶ月をかけて修復されました。そして9月27日から岐阜高島屋で開催された「日米人形交流展」では、新しく作られ

人形は、県内各地の主な小学校・幼稚園、岐阜市では金華・京町・明德小などの19校へ配られました。人形が贈られた学校ではそれぞれ歓迎会が開かれ、お礼の手紙を出しました。



八百津・和知小のパッテロー

明德小学校・児童代表の手紙

「花のような愛らしいお人形さんをお贈り下さいましたご好意、厚くお礼申し上げます。：私たちの学校へもそのお人形さんがいらっしやいました。すると、お人形さんはお国がこいしくなったのか『ママア』と泣きました。：(中略)：あなたの国と私の国との間を結ぶ友情のお人形さんは、とこしえに日本の国で幸福に日を送ることを信じてください。まだ見ぬアメリカのお嬢さん方、いつまでも仲良くいたしましょう」

学校からは返礼の品を送りたいという申し出も多く、答礼人形を贈ることが決められました。岐阜県では児童から集めた寄付667円18銭で人形を作ることになりました。



ミス岐阜(ギフ子さん)

こうして岐阜県の答礼人形「ミス岐阜(ギフ子)」が誕生しました。

3 「ミス岐阜(ギフ子さん)」

「ミス岐阜」の手足は自由に動き、着物は友禅縮緬で、帯は金糸丸帯を胸高く締め、小さい口元がほほえんでいて、それは愛くるしい人形でした。履物、傘、鏡台、針箱、筆筒、長持などの美術品も持っています。

10月8日に明德小学校で人形送別会が盛大に行われました。校長からギフ子さんの身の上やアメリカに行く使命について説明があり、一同起立して児童代表が「惜別の辞」を述べ、同校で作られた「送別の歌」を女生徒が歌い、最後のお別れをしました。

4 …しかし…

人形のたどった運命は…

日本は、1931年(昭和6)以後中国との戦争を拡大し、ついに1941年(昭和16)には米英などとも戦争を始めました。それに伴い

それは「クリーブランド人形・セーラ」、そして1996年(平成8)2月末同校へ贈られてきた「新青い目の人形・マリリン」、さらに2003年(平成15)アメリカ・カンザス州の女性から贈られた友好人形「スーザン・キブソン」です。1927(昭和2)年に始まった「日米親善・友好」の心が、今も、岐阜の子供たちの中で続いているのです。

注・昭和2(1927)年、アメリカから岐阜県に贈られた235体の「青い目の人形」が、今も残っているのは、八百津・和知小の「パッテロー」と「メリーブランナー」(上麻生小・現在は大垣の個人所有)の2体だけです。

○この文章は、多くの文献や資料、特に「ミス岐阜」里帰り実行委員会発行の文献を元に、長縄幸弘さん(元明德小学校教諭・実行委員会事務局員)の協力を得て、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティアガイド

代表 後藤 征夫

「お話・岐阜の歴史」

http://bookgeocities.jp/gifuwiki/ekistop.htm
TEL 058-231-6726